

## (8) その他花き・樹木類

### ○ ガーベラ

#### 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
疫病 ( <i>Phytophthora</i> )	<p>①ほ場が過湿にならないよう排水を良くしたり、高畝栽培とする。また、地際への灌水は極力避け、株元が乾燥した状態にする。</p> <p>②発病株は早期に取り除き、適切に処分する。</p> <p>③葉かきをこまめに行い、株元の通風を図る。</p> <p>【参考事項】 植物残さ上に形成される卵胞子が土壤中で生存し、伝染源となる。次作において、卵胞子が発芽し形成された遊走子のうから遊走子を遊出して水媒伝染するので、降雨の多い時期や、ほ場が冠水した場合などに多発する。</p>	<p>①発病初期に土壌灌注する。 (例) プロバモカルブ塩酸塩液剤 (プレビクールN液剤)</p> <p>②鉢上げ時、鉢替え時又は生育期に土壌灌注する。 (例) アミスルブロム水和剤 (オラクル顆粒水和剤) (ポット・プランター等の容器栽培)</p>
ミカンキイロアザミウマ	<p>①未発生施設では苗の移動に伴う持込みに注意する。</p> <p>②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。0.8mm目合いの赤色系ネットを使用すると侵入防止効果が高まる。</p> <p>③不必要な株、花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。</p> <p>④ほ場周辺の雑草にも寄生するので、除草する。</p> <p>⑤発生施設では改植時に10日以上密閉して蒸込みを行い、成虫や蛹を死滅させる。</p> <p>【参考事項】 農作物、雑草を問わず多種類の植物、特に花に寄生する。本種は花卉や芽の隙間に生息しているため、農薬は丁寧に散布する。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。 (例) アバメクチン乳剤 (アグリメック) (アザミウマ類) クロルフェナピル水和剤 (コテツフロアブル) スピネトラム水和剤 (ディアナSC) (アザミウマ類) フルフェノクスロン乳剤 (カスケード乳剤) マラソン乳剤 (マラソン乳剤) (アザミウマ類)</p>
マメハモグリバエ	<p>①ほ場周辺の雑草にも寄生するので、除草を行う。</p> <p>②施設の開口部に目合い0.8mm以下の防虫ネットを張り、成虫の侵入を防ぐ。</p> <p>【参考事項】 キク科やアブラナ科の雑草(ノボロギク、チチコグサモドキ、ナズナなど)は主な発生源となる。</p>	<p>①定植時に粒剤を植穴土壌混和処理する。 (例) ジノテフラン粒剤 (スタークル粒剤、アルバリン粒剤)</p> <p>②発生初期から農薬を散布する。 (例) エマメクチン安息香酸塩乳剤 (アフファーム乳剤) (ハモグリバエ類) カルタップ水溶剤 (パダンSG水溶剤) シロマジン液剤 (トリガード液剤) スピネトラム水和剤 (ディアナSC) (ハモグリバエ類) フルフェノクスロン乳剤 (カスケード乳剤)</p>

### ○ ポインセチア

#### 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
根腐病 ( <i>Pythium</i> )	<p>①作付け前に栽培ベッドの植物残さや残土を片付け、洗浄する。</p> <p>②作付け前に培養タンクと栽培ベッドの殺菌を行う。</p> <p>③夏季の施設内の気温や培養液タンクの液温をできるだけ低く管理する。</p> <p>④施肥量は過剰にならないようにする。</p> <p>⑤軽い萎凋症状が見られた発病株は、鉢土とともにただちに廃棄する。</p> <p>【参考事項】 3種類の高温性<i>Pythium</i>属菌が主な病原菌である。発生時期は6～10月で、7～8月に多発する。特に、35℃前後の高温と多湿条件で発病が多くなる。伝染源は、被害残さ、土壌、ミニバラなどの前作物で、土壌伝染と水媒伝染(病原菌の遊走子が水で移動する)をする。ミニバラ、バラ、ガーベラ、ペゴニア、カランコエ、キクなど多数の植物に発病し、被害を与える。</p>	登録農薬はない。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
コナジラミ類	①施設周辺の雑草を除草する。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、成虫の侵入を防止する。	①生育期に粒剤を株元土壌混和する。 (例) イミダクロプリド粒剤 (アドマイヤー 1 粒剤) ②発生初期から農薬を散布する。 (例) ニテンピラム水溶剤 (ベストガード水溶剤) ピリダベン水和剤 (サンマイトフロアブル) フェンピロキシメート・ブプロフェジン水和剤 (アブロードエースフロアブル)
<p><b>【参考事項】</b>  オンシツコナジラミとタバココナジラミ類が寄生し、排泄物によりすす病が発生する。初期防除に重点をおく。  タバココナジラミバイオタイプBとは薬剤感受性が異なり、遺伝子診断のみで識別可能なタバココナジラミバイオタイプQの発生が、県内各地の施設野菜などで確認されている。  農薬の使用状況により、ほ場によってはバイオタイプBからバイオタイプQに置き換わっている場合があるので注意する。また、バイオタイプQは、ピリプロキシフェン剤 (ラノータープ) に対して著しく感受性が低下していることが多い。</p>		

## ○ シンビジウム

### 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
モザイク病 (ORSV, CyMV)	①鉢や用土は新しい物を使う。 ②病徴を生じた株は除去し、適切に処分する。 ③作業に使用するハサミなどは、こまめに消毒する。	①株分け時に株の10分間浸漬を行う。 (例) シイタケ菌糸体抽出物液剤 (レンテミン液剤) ②管理作業時に手指・器具を薬剤に浸漬し、濡れた状態で使用する。 (例) シイタケ菌糸体抽出物液剤 (レンテミン液剤)
<p><b>【参考事項】</b>  オドントグロッサムリングスポットウイルス (ORSV)、シンビジウムモザイクウイルス (CyMV) とも汁液伝染する。株分け、移植、採花などの作業時に、手やハサミなどの器具及び作業台などの汚染により接触伝染する。</p>		
軟腐病 (細菌)	①作業に使用するハサミなどは、こまめに消毒するとともに、植物体を傷つけないように注意する。 ②鉢や用土は新しい物を使う。 ③発病株は早期に取り除き、適切に処分する。 ④高温多湿、灌水多過を避ける。	登録農薬はない。
<p><b>【参考事項】</b>  発病適温は30℃前後で病原菌は高温多湿を好む。病原菌は害虫の食害痕などの傷口から侵入する。</p>		
疫病 ( <i>Phytophthora</i> )	①発病株は早期に取り除き、適切に処分する。 ②多湿、灌水過多を避ける。 ③棚下に水たまりができないよう注意する。 ④戸外では長雨にあてない。	①鉢上げ時、鉢替え時又は生育期に土壌灌注する。 (例) アミスルブロム水和剤 (オラクル顆粒水和剤) (ポット・プランター等の容器栽培)
<p><b>【参考事項】</b>  病原菌の生育の適温は22℃前後である。戸外では梅雨期、秋期に長雨にあたると発生しやすい。</p>		
腐敗病 ( <i>Fusarium</i> )	①鉢や用土は新しい物を使う。 ②発病株は早期に取り除き、適切に処分する。	登録農薬はない
<p><b>【参考事項】</b>  通常土壌伝染するが、病株上の分生子の飛散によっても伝染する。</p>		